黄道周の書論

河内利治

一　はじめに

黄道周（一五八五―一六四六、福建漳浦人、字は細遵・玄度・幼平、石斎先生と称せられる）は、明末を飾る思想家・政治家・芸術家であり、異民族支配に屈せず明朝への忠節を最後まで貫いた志士である。彼の崇高な民族気節と学術上の淵博な造詣は、『明史』本伝に「文章風節高天下」と称えられ、また清朝からも「一代完人」と尊ばれている。[1] 筆者はこれまで、黄道周という人物の全体像を解明するため、文人として、政治家として、思想家としてといった視点から順次考察を試みてきた。[2] 本稿ではさらに芸術家としての視点から、特に書論家としての視点から考察してみたい。

清朝帖学派の大家王文治（一七三〇―一八〇二）から「楷格は遒媚、直ちに鍾王に逼る」（『快雨堂題跋』巻五「黄石斎孝経」）と称讃され、賞鑑家秦祖永（一八二五―一八八四）からも「行草は筆意、離奇超妙、深く二王の神髄を得たり」（『桐陰論画』）と高い評価を博した黄道周の書は、「漳浦体」と呼ばれ、現代日本においては哲学・思想・文学等のどの面よりも書家としての側面が一番広く知られている。この評価は、黄道周が書道史上、明末清初という時代にあって、董其昌・張瑞図・王鐸・倪元璐・傅山とともに、「ロマンチシズム運動」[3] と呼ばれる非常に個性豊かな書の作品を創造したことに基づいている。しかし、創造の結晶である書芸術作品に対してはすでにこのような評価が固定しているものの、その一方、黄道周が書を実際に制作する上で、書芸術をどのようにとらえ、どのような書を理想としたか、また同時代の家をどのようにみなしていたかなどの本質的な理念の問題については、殆ど解明されていない情況にある。

明代の代表的書論といえば、元の趙子昂の優麗典雅な書風を通して間接的に王羲之を学ぶのではなく、王羲之の典型を奉じ直接に王羲之を師として、宋の蘇軾・黄庭堅・米芾の書を排斥する項穆の『書法雅言』と、「晋人の書は韻を取り、唐人の書は法を取り、宋人の書は意を取る」として宋人を支持する董其昌の『画禅室随筆』とが挙げられる。項穆などに見られる復古的な書論を凌駕して革新的な書論を打ち出したのが董其昌であるが、この董と同時で、やや後輩にあたる張・黄・王・倪・傅の人々の運動は、本質的に董と大変違うものであるとされるが、黄道周については、書に対するまとまった論著がないためか具体的な研究が進んでいない。(5) しかし書に関する文章は多少なりとも全集などに散見できるので、それらから黄道周の書に対する理念を考察してみたいと思う。

二　書に関する文章

書に関する黄道周の文章には次の六編がある。

「書品論」（『黄漳浦集』巻十四・論）
「与倪鴻宝論書法凡三則」
（『黄漳浦集』巻十九・書）
「書秦華玉鐫諸楷法後」
（『黄漳浦集』巻二十二・書後）
「書顔魯公郭公帖後」
（『黄漳浦集』巻二十三・書後）
「題自書千字文帖後凡三章」
（『黄漳浦集』巻二十三・書後）
「書倪文正公帖後凡三章」
（『黄漳浦集』巻二十三・書後）

このうち、「書品論」は『啓功叢稿』「堅浄居芸談」に収録されている「黄石斎《墨池偶談》巻」（以下《墨池偶談》と略す）と題する一編と同文と思われるものである。(6) 啓功氏は黄濬の『花随人聖盦摭憶』に摘録された文章と、《墨池偶談》の真跡の文字とを対校して全文を記録している。(7) そして末尾に「功按此巻不見『漳浦集』、蓋乗興随筆所記」と述べている。しかし『漳浦集』即ち『漳浦黄忠端公先生集』（内閣文庫収蔵本）巻十四の「書品論」（一に「墨池小談」に作る）と、この《墨池偶談》を照合すると両者はほぼ一致する。(8) 「書品論」という一編は、啓功氏が指摘する通り、「興に乗じ筆に随せて記せる所」かもしれないが、書に関するいくつかの重要な観点を含んでいる。書論はその内容から書体（篆隷楷行草その他）、書法（書の技巧・用筆他）、書学（書を論じ研究するもの）、書品

（書の優劣上下の品第・評価）の四つの部門に分けることができるが、この「書品論」は題名こそ書品となってはいるものの、品第だけを行っているのではなく、学書に対する姿勢、各書体とその代表とみなせる書、同時代明代の書に対する評価、さらに文房四宝への言及といった広範囲にわたる見解から構成されている。それゆえ黄道周の書論を考察する上での第一等の資料と言える。なおこの「書品論」の制作年代について、黄濬は崇禎七年甲戌（一六三四）としており、その説に従うと黄道周五十歳の時の作となる。

「与倪鴻宝論書法凡三則」は、親友倪元璐に宛てて書を論じた手紙三通である。特に理想とする書法美―「遒媚」を唱えた貴重な文章（第一則）を含んでおり、他にも学書に対する姿勢を示唆する韋誕の故事（第二則）、同時代の書に対する評価（第三則）が語られていて、「書品論」とともに黄道周の書論の根幹をなすものと言える。

「書秦華玉鐫諸楷法後」は、同時代の書に対する評価が中心になっており、主にこの点において、「書品論」や「与倪鴻宝論書法凡三則」（第三則）とあわせ読むべき必要がある。なおこの一編の制作年代はその款記「辛未十月五日書」から、崇禎四年（一六三一）、黄道周四十七歳の時の作となり、ここに挙げた六編の文章中、制作年代の一番早いものと思われる。

「書顔魯公郭公帖後」は、顔真卿の『争坐位帖』についての書後で、理想とする書法美―「遒媚」を具備する書として評価した黄道周の見解である。

「題自書千字文帖後凡三章」は、摸本の精巧さについて（第一章）、学書に対する姿勢（第二章）、欧陽詢の千字文と褚遂良の千字文についての意見（第三章）からなり、特に第二章は「書品論」とあわせ読むべきものである。

「書倪文正公帖後凡三章」は、倪元璐が壬午（一六四二）の年から癸未（一六四三）の年にかけて書いた五六十帖に、その書を評して綴ったもの（第三章）が中心となっている。「与倪鴻宝論書法凡三則」とあわせ読む必要があろう。

以上の文章の論点を整理すると、書を論じ研究する姿勢、理想とする書法美、同時代の書の品第評価の三点になる。よって以下、この三点に絞って順次考察していきたい。

三　学書に対する姿勢

先ず書を論じ研究する姿勢、つまり学書に対する姿勢について見てみたい。

「書品論」の冒頭は、書のみによって一家を成そうとする者にとっては耳に逆らう非常に辛辣な警句から始まっている。

書を作るは是れ学問中の第七八乗の事なり。切に此を以て関心する勿かれ。

上述した通り、「書品論」の制作年代が黄道周五十歳の時だとすると、この一句は、黄道周が自身の生き方を振り返り、現実に照らしてみて、学問における書芸術の地位を端的に位置付けたものととれよう。書は所詮、学問の中では第七番目か第八番目の枝葉末節にすぎず、それよりももっと大切で身につけなければならない学問があると言うのである。このような言わば書軽視の考え方は、「題自書千字文帖後凡三章」の第二章で、

終に是れ小道にして、神を留むるに足らず。

と言ったり、又「書品論」の別の一段で、

余は素此の業を喜ばず。只謂へらく釣弋余能、少賤の該ふる所、投壺騎射、反って宜き所に非ずと。

と述べていることからも、はっきりと看取できる。書は単なる余暇の一事に過ぎず、魚を釣ったり鳥を射ったりする事と同程度の「小道」であり一種の遊びであるから、そのようなものに対して精神を傾けてはならないと言い切るのである。しかし、

老大人の些か清課を著すは、便ち孩子と一般なり。学問人の些か伎倆を著すは、便ち工匠と別無し。然れども就ち此の中人を引きて道に入らしむべき処有り。亦た説間一番するを妨げず。正に是れ小物に遇ふも時に大道に通ずるなり。（「書品論」）

と書のような「小道」でも、時としては「大道」に合致することもあると説き、決して頭ごなしに書を否定するわけではない。「第七八乗の事」、「終に是れ小道」と述べるのは、あくまで学問中における優先順位を語っているのである。

では黄道周が第一番目の学問として求めたのは一体何であろうか。それは、政治家として世に名を成すための学問である。黄道周は東林党グループに属し、当時の東林党に属す正義派の思想からすれば、正義を貫く政治家として世に名を成し、そのための学問を身につけることが何よりも重大な使命であった。これは東林党に共通する使命であり、黄道周とて決して例外ではなかった。

黄道周は天啓二年（一六二二、三十八歳）に進士となったが、時に宦官魏忠賢を領袖とする閹党の「虐焔方に熾(9)ん」な頃であったので、文震孟や鄭鄤と互いに「言を尽し

て国に報じ[10]」、「共に魏璫を劾す[11]」ことを約束しあった。同六年（一六二六、四十二歳）、東林党七君子の一人周起元が閹党によって迫害され投獄されると数千金を得て救済を計り、崇禎四年（一六三一、四十七歳）には前の宰相銭竜錫を救わんがために三度続けて上奏して「降三級調用」され、さらに翌五年（一六三二、四十八歳）には国政を憂えて二度上奏し、官籍を削除され平民に貶された。そして二年後の五十歳の時には、故郷で弟子と講論し、経を談じ、しばしば人に史を読むことを勧め、来たるべき日に備え、朝政を革新しようとしていたのである。

「書品論」は正にこのような社会情勢のもとで書かれたのである。そのため黄道周には以下に挙げるように、書によって名声を得た王羲之・趙孟頫・韋誕の三家に対し、その生き方には賛同できないという指摘がある。

王逸少（羲之）の品格は茂宏（王導）安石（謝安）の間に在り。雅より臨池を好むが為に、声実倶に掩はる。（「書品論」）

趙松雪（孟頫）、身は宗藩なるに、禄を元廷に希ひ、特に書画を以て価を芸林に邀む。（同前）

太極殿成る。謝公（安）意に子敬（王献之）を得て書せしめんと欲す。仲将（韋誕）の事を挙げ子敬に告げて云ふ、「仲将、櫈に懸くるの後自り、児曹に勅断し、復た書を作らしめず。此れ自り楷法絶えて少なし」と。此れ子敬を動かさんと欲するなり。子敬直ちに云ふ、「仲将亦た是れ魏朝の大臣、乃ち此の事が為に、魏徳の長からざるを占ふに足る」と。謝公遂に止め、乃ち張翼に命じ之を為らしむ。（「与倪鴻宝論書法」）

人としての品格は、王導や謝安に比肩するものをもちながら、書を好んだがために、その人格は、後世から書聖と仰がれるほどの名声に覆われてしまった王羲之、また宋の王室に連なる身でありながら、蒙古人のために働き、書画によって名声を得てしまった趙孟頫、さらに能書家としての名声を馳せたために、凌雲台の高所にのぼって扁額に題署させられ、一命を落しかねない目にあった韋誕、この三人に共通するのは、書名によって本来の能力が覆われてしまった点である。黄道周は能書家として名声を博すことよりも、政治に参画して功成り名を遂げよと言いたいのである。それゆえそのためには、経史の学を修め、実学の精神に基づく「経世致用」の道を実践していかねばならないと説く。「書品論」には、

人の書を読まんとせば、先づ他の学ぶ所の何の学なるかを問ふを要す。次いで他の志す所の何の志なるか

を定むるを要す。然る後、経史に淵瀾し、百氏に波及す。

とあり、まず著者の基づく学説や著者の志向を知り、その後に読書するようにと勧める。黄道周がこのように言う理由は、後学の青年男子や当時の子弟達が読書の仕方を理解していない現状を憂慮したことにある。

後生の少年、進取高からず。往往にして是れを以て前喆に膾炙するは、猶ほ五鼎に従ひて以て残羹を啜り、閲門に入りて苴履を懸くるがごとし。（「書品論」）

近来の子弟、間雅好有るも、祇だ標題を看て、法意を弁ぜず。法意を問談して、文義を尋ねず。筆を把り管を握り、俛仰観るべしと雖も、自ら身心に反き、何の干渉有らんや。（同前）

この二文を読んで分るように、「書品論」を書いて訴えたかった対象は、即ちこれら後学の青年男子や当時の子弟達である。そして彼等の学書態度を是正しようとしたのである。もし前代の賢人について論じるならば、その品徳に注意すべきであるのに、彼等はその末節や細微に注意を払うだけであり、文章の意味を忘れ去ってしまっている。このような状態では如何ともしがたいと嘆息し、書と自己の心身との関係をよく考えよと訓戒するのである。こういった態度は、蘇軾の「古の書を論ずる者は、兼ねて其の平生を論ず。苟くも其の人に非ざれば、工みなりと雖も貴ばざるなり」（「書唐氏六家書後」）を踏まえ、「凡そ書は其の人と為りに象る」（同前）と主張するのと同一のものである。歴代の書芸術の批評家たちが、作品とともに作者の平素の生活を問題にし、単に書法が巧みなだけでは、その価値を認めなかったという考え方に黄道周も立脚していよう。この観点はつまるところ、

雅尚の倫は、便ち当に其の意義を尋ね、其の体況を別つべし。安んぞ能く闇然として汁を食らひ毫を腐らせ、梁鵠・皇象の儔と驪を比べ轍を斉しくせんや。（「書品論」）

という一文に集約されている。文章の意義を探求し筋道を弁別できるように文字を書かねばならないのであって、平素からそのように心がけなければ、いくら筆に墨をつけて書の鍛練を積んでも、それは単に筆を腐らせるだけのことである。かの梁鵠・皇象などの大家の後を受け継ぎ肩を並べることなどできようかと言うのである。いたずらにただ字だけを並べてそれでよしとする書は書でもなんでもなく、真の書と呼べるものではないからである。

黄道周の学書に対する姿勢は、上述のように実学の精神

に基づく「経世致用」の道を実践することを最優先させるため、必ずしも積極的とは言えない。しかし次のような条件下では書を書いてもよいと言う。

若し心手をして余間あらしめば、旁く及ぶを妨げず。（同前）

と余暇に書く場合や、

自から是れ著述の意倦み、講論の期疎にして、風日気調ひ、筆研具に釆なりて、属致之に及び、波瀾有るに似たり。（同前）

と著述に疲れて書きたくなったときに書く場合、さらに、

筆精墨良にして、几案に値はば、山水に逢ふ時の如く重ねて之に遊ぶのみ。（同前）

と好ましい筆墨にめぐりあったときに楽しく書く場合など、余裕ある精神のもとで書くことを認めている。

東林党に属して正論をはく政治家の立場にあった黄道周にすれば、書三昧に耽る余裕などほとんどなかったであろうが、精神状態の良好なときは、暇をみつけて気のむくままに翰墨の世界に遊んだであろう。そうでなければ「漳浦体」とまで呼ばれる書をうちたてることは不可能であり、個性豊かな書芸術を創造できるはずなどなかったであろう。

四　理想とする書法美

「与倪鴻宝論書法凡三則」の第一則の冒頭には、黄道周が理想とした書法美が端的に述べられている。

書字は自ら遒媚を以て宗と為し、之に加ふるに渾深にして、佻靡に墜ちざれば、便ち上流に足る。

つまり理想とする最高の書法美は、「遒媚渾深」にして「佻靡に墜ちざ」るものということになる。「遒媚」は「遒美」と同義で、剛健美麗なこと。『新唐書』選挙志下に「凡択人之法有四、…三曰書、楷法遒美」（巻四五）とあるのに基づく。「渾深」とは円密深沈とした雄渾な深みのこと。「佻靡」とは軽佻靡弱、すなわち浮軽さ軟弱さのことである。では黄道周が宗師とする「遒媚」の書とは、具体的には如何なるものを指すのであろうか。それについては、

衛夫人、右軍の書を称して亦た云ふ、洞精なる筆勢は遒媚にして人に逼るのみと。（同前）

という言葉があり、さらに「書顔魯公郭公帖後」にも、

今此の帖（争座位帖）を観るに、遒媚翩然たり。高きは逸少に斉しからんと欲し、卑きも亦た米顚に近からず。唐室の風有りと雖も、尚ほ永和の裔を宏くす。

とあることから、黄道周が「遒媚」と考える書は王羲之と

顔真卿の『争座位帖』であると言える。衛夫人の言葉を引用し、王羲之の書は筆勢を深く認識し、人に「遒媚」と感じさせる筆致を表出しえており、『争座位帖』にも「遒媚」かつ軽快な趣があり、唐朝の書風ではあるが、やはり「永和」年間の書（王羲之『蘭亭序』）の後を受け継いでいるとする。王・顔の書を正宗と崇めたことは、

古の儁流自り筆墨の存する所、皆訓を垂るべし。右軍書『楽毅論』・『周府君碑』、顔公『坐位帖』の如きは、尚ほ意義の尋ぬべき有り。其の余は悠悠として豈に伝播すべけんや。（「書品論」）

という一文に明確に打出されている。王・顔の書を第一に推すことは、明代書家に一致する見解なのだが、この二人の書を推す理由として、黄道周は「遒媚」という一語を選んだと言えよう。

「遒媚」という一語の歴史的使用例をみると、どうやら唐代以後の評語のようである。例えば、何延之の「蘭亭記」には「修祓禊之礼、揮毫製序、興楽而書、用蚕繭紙・鼠鬚筆、遒媚勁健、絶代更無」とあり、名跡『蘭亭序』を「遒媚勁健」という語でもって評し、また李商隠も「太尉衛公会昌一品集序」（『李義山文集』巻四）で「王子敬之隷法遒媚、皇休明之草勢沈著」といい、王献之の書を「遒媚」と評している。宋代に入ると、先に引いた『新唐書』選挙志下もそうであるが、同書「裴休伝」に「休能文章、書楷遒媚有体法」（巻一八二）とあり、裴休の楷書の美を「遒媚」とみなしており、さらに書学に精しい蘇頌（一〇二〇―一一〇一）の「題枯樹賦跋」には「観其筆力遒媚頗逼二王、非河南不能為也」（『魏公題跋』）とあり、『枯樹賦』を書いた褚遂良の筆力を「遒媚」という一語でもって評している。さらに明代中期の何良俊には「正書祖鍾太傅、用筆最古。至右軍稍変遒媚」とか、「余家有松雪小楷『大洞玉経』、字如蠅頭、共四千八百九十五字、円匀遒媚」（『四友斎叢説』巻二七）とあり、王羲之の楷書と趙孟頫の小楷を「遒媚」であるとみなしている。このように「遒媚」の使用例を拾っていくと、二王の書法美を表現する場合か、楷書の筆勢・筆力の美を評する場合に用いられていることに気付く。黄道周の「遒媚」もこういった観点を踏まえたものと言えよう。なお当時の書壇の第一人者である董其昌は、『争座位帖』を顔書の第一に推し、「平原（顔真卿）の『争坐位帖』を以て蘇・米に求むるに、方に其の変ぜるを知らん。宋人にして『争坐位帖』を写さざるは無きなり」（『画禅室随筆』）と述べ、集帖『戯鴻堂帖』巻八にこれを刻し入れている。

後世、黄道周が重んじたこの「遒媚」という語を以て、黄道周の書、特に楷書を「楷格遒媚、直ちに鍾・王に逼る」と評したのは清朝帖学派の王文治であるが、もし黄道周自身がこの言葉を聞いたならば、これ以上の賛辞はないと思ったにちがいない。

五　明代書家に対する評価

黄道周は明代中期から末期にかけて活躍した書家に対し、その書の評価を下している。彼が評価の対象とした書家は、その殆どが『明史』文苑伝に名をつらねる人達であり、今日の書法史からみても名家とみなされる人々である。この点は彼が書に精通していたことを証明していよう。評価の対象となった書家を生卒年代順に列挙すると次のようになる。

文徴明（一四七〇―一五五九、長洲人、名は璧、字は徴明・徴仲、号は衡山）
王穉登（一五三五―一六一〇、長洲人、字は伯穀、号は百谷）
邢侗　（一五五一―一六一二、臨邑人、字は子愿、号は来禽生）
董其昌（一五五五―一六三六、華亭人、字は玄宰、号は香光）
黄輝　（一五五九―?、南充人、字は平倩・昭素、号は慎軒）
米万鍾（?―一六三一、宛平人、字は仲詔、号は友石・湛園、米芾の末裔）
劉履丁（?―?、趙州人、字は漁仲、黄道周の畏友、篆刻家）
倪元璐（一五九三―一六四四、上虞人、字は玉汝・汝玉、号は鴻宝・園客）
王鐸　（一五九二―一六五二、孟津人、字は覚斯、号は十樵）

先ず文徴明については、「八分は文徴君を以て第一とす」（「書品論」）、「千古の臨池、…遂に絶徳を成す」（「書秦華玉鐫諸楷法後」）とのべ、文の「臨池」こと書業の高さを認めている。ここでいう「八分」は隷書の八分隷ではなく、所謂る「蠅頭」書の小楷を指すのではなかろうか。文徴明と言えば、後人の評価では小楷が一番高いが、その点を黄道周も指摘したと考えられる。雲間派の董其昌は、呉中派の文徴明・祝允明の二家に対して「空疎にして実際なきをもって」（『画禅室随筆』評法書）であるといい、対抗意識をむきだしにして激しく非難する。雲間派にも呉中派にも

属さない黄道周は、中立の立場にあるため、黄道周の評は董其昌より妥当と言えるし、さらに一歩すすめて言えば、文徴明に反抗しようとした董其昌を超越しようとしたと考えられる。

王穉登については、「王百穀は『薦福』を学び、大旨を備へ得たり。惜しむらくは其の能多く八分に侈し、却て清截遒媚なるも、亦た得易からず」（「書品論」）、「王百谷の臨書は『薦福』自り上にして、佻達極精なり。惜しむらくは名位の掩ふ所と為る」（「書秦華玉鐫諸楷法後」）とのべ、欧陽詢書の『薦福碑』を善く学んでいるが、名声と官位が王の書業を覆っており、善悪を論じがたいとする。「清截遒媚」という評語は、後に述べる倪元璐に次ぐ非常に高い賛辞であるが、王穉登は文徴明の後継者的存在であり、文徴明の書業を認める以上、王穉登に対してはその分要求が厳しくなっていると言えよう。

黄輝・邢侗・米万鍾については、「前輩盛んに黄平倩・邢子愿両公を推すも、真楷を作らざれば、備さに論ずるを得ず」（「書品論」）、「邢子愿・米仲詔各其の能有り。大要、貞元より後、永徴より前にして、其の米筆を求むるも、亦た復た得べからず」（「与倪鴻宝論書法」）、「米友石、晩年大いに閫奥を窺ふも、復た蠅頭を作らず。今已に杳然たり」（「書秦華玉鐫諸楷法後」）とあり、この三家はいずれも楷書や文徴明が得意とした「蠅頭書」つまり小楷を書かないので評論のしようがないという。今日伝わる書跡からみると、黄輝・邢侗・米万鍾ともに確かに行書が中心で、米芾の書を善く習得した二王風の手である。

董其昌については、「董先輩、法力は包挙し、臨模の制、前賢より極む。率ね其の姿力も亦た時に佳とし難し」（「与倪鴻宝論書法」）、「董宗伯の袠集を見るに、已に古人の能を尽す。而れども…半ば嫵媚に帰し、其れ排比整斉に次まるのみ」（「書秦華玉鐫諸楷法後」）といい、書論面においてはその影響を受けているのに比し、実作の書の面においては「時に佳とし難し」とか「半ば嫵媚に帰し」とあるようにかなり批判的にとらえている。これは先の呉中派の書を評価する一方、実質的に董の書を高く評価しないことを意味するが、黄道周の意識の根底には、董書を何とか超越しようとする欲求が内在しているように感じる。

劉履丁については、「劉魚仲は諸体備さに源瀾有り。近ごろ頗る汎濫す。然れども法乗の中に在りて、骨相行蔵し、只肥瘦有るのみ。肥えたる者は右軍の李衛を師とし、瘦せたる者は率更の右軍を変じたるがごとく、此の両途を除けば、別に正法無く、旁く及ばざるなり」（「書品論」）

と「肥者」「瘦者」の「両途」には王羲之・欧陽詢の「正法」＝正当な筆法をみることができ一応評価できるものの、それ以外には「正法」が見られないとする。

以上の数家については、呉中派を除き一応の評価は与えるものの、全般的にみればむしろマイナス評価の方が強い。これら数家とは反対に、倪元璐と王鐸にはプラス評価がなされ、とりわけ倪元璐に対しては多大なる賛辞が連ねられる。

同年中、倪鴻宝の筆法、深古たり。遂に能く子瞻（蘇軾）・逸少の長を兼ね撮る。…十数年過ぎるも亦た王・蘇と幷びに宝たり。当世、但だ鄙屑之を為さざるを恐るのみ。（「書秦華玉鐫諸楷法後」）

骨力嶙峋し、筋肉輔茂し、俛仰操縦せんと欲するが如きは、倶に人に繇らず。蔡（襄）を抹し、蘇（軾）を掩ひ、王（羲之）を望み、羊（欣）を逾ゆるは、宜く倪鴻宝に如く者無かるべし。但だ今肘力正に掉ひ、著気太だ渾なれば、人従ひて未だ其の妙を解せざるのみ。（「書品論」）

此の老（倪元璐）を看るに、是れ逸少以上の人なること分明なり。世人の尊耳、以て怪論と為すも、今竟に如何ん。壬午（一六四二）初年、僕、公の書を作るを見、人に告げて云く、「鴻兄の命筆、顔魯公・蘇和仲（軾）より上に在り。其の人も亦た絶出す」と。諸君訝り、未だ敢えて信ぜず。…然して晋宋自り上下し、惟だ逸少・和仲のみ、公の一身に通ず。（「書倪文正公帖後」）

倪鴻宝の子瞻を為すは、独り規模則に応ずるのみならず。其れ神理も亦たまさに前を超えんとす。（「与倪鴻宝論書法」）

この四文を総合すると、倪鴻宝の筆法は規則に応じているだけでなく、「深古」で自由自在に「俛仰操縦」し、墨宝とされる王羲之・羊欣・顔真卿・蔡襄・蘇軾といった書法史上の名家の「神理」を兼ね備え、また人格も「絶出」の存在である。しかしこのような見方は、当世の人々には「怪論」に聞こえ、「其の妙を解せず」信じようとしない。今にきっとこの見方が正当化されるであろう、ということになろう。言うまでもなく、倪元璐に対する黄道周の評価は、先に見た明代の書家の誰よりも高い。[12] 何故これほどまでに倪元璐を高く評価するのかについては、思うに、黄道周は倪元璐を高く評価することによって、自分がかくありたいと願うところを述べようとしたからであろう。つまり人格・書法両面における指標として表現したかったのでは

ないだろうか。確かに倪元璐は、後世から書法史上に確固たる地位を与えられてはいるが、「絶出」という黄道周の見解ほどの地位は与えられていない。むしろその面では、王鐸の方がその有資格者のようである。

王鐸については、「行草は近くは王覚斯を推す。覚斯は方に盛年なり。其の五十なれば自ら化するを看ん」（「書品論」）と、将来を加味してプラス評価を下している。黄道周のこの言葉は、恐らく王鐸に対する最初の評語であろう。その意味においては先見の明があったと言うべきである。

以上が黄道周の明代書家に対する評価のすべてであるが、倪元璐と王鐸に対する見方は、ともに同年の進士として翰林院で書を研鑽しあった仲であったことを差し引いても、やはり傾聴すべき評価であると思われる。

但し一つだけ気になる点は、張瑞図（一五七〇―一六三九、晋江人、字は長公、号は二水・白毫菴・果亭山人）について一言も触れられていない点である。「邢張董米」と称される四家のうち、邢・董・米については上述したような評が見られるが、張瑞図については全く言及されていない。張瑞図は宦官魏忠賢を頌し、魏の生祠の碑文を丹書し、東林党の人々を論難するために作成した『三朝要典』の編纂副総裁になった人であり、東林党に組する黄道周は、張のそのような人格面を忌み嫌い、たとい芸術的な成果を残そうとも評価の範疇に組み入れることを避けたのではないかと考えられる。

六　小結

以上、黄道周の書論を学書に対する姿勢、理想とする書法美、明代書家に対する評価といった三つの角度からそれぞれ考察を進めてきた。彼の書論をまとめると次の様になる。

第一に書家として名声を得るよりも、政治面で功成り名を遂げることを人生における重大な使命とせよという実学重視論である。「書を作るは是れ学問中の第七八乗の事」という言葉は、そのまま受けとれば書軽視ともとれなくはないが、書に専念して「大道」を見失うなという警句と解すべきであろう。

第二に「遒媚」という書法美を提唱し、その書法美を具備する書跡として王羲之と顔真卿の書を掲げ、さらに「遒媚」を通じて自己の書を導こうとしたことである。

第三に親友倪元璐の書が「神理」を兼ね備え、かつ人格も「絶出」の存在であると激賞するとともに、倪の書と人

格を通じて自分がかくありたいと願うところを述べたことである。

以上の三点から見るかぎり、彼の書論は必ずしも董其昌を超越してはいないが、独自の視点から伝統を踏まえ、新しい書の美を創造していこうとした態度は看取できよう。しかしその一方で、人に因りて芸を廃し、芸に因りて人を廃すという人品と書品を混同する前近代的な視点から書芸術を論じるという陥穽におちいってしまっている。この点は、一人明末の黄道周のみならず、書論史上、普遍的な伝統的な考えであるが、やはり人品と書品を切り離して考えていかなければ、今後新たな書論は展開できないであろう。

注

(1) 舒赫德・于敏中等撰『欽定勝朝殉節諸臣録』上論に「如劉宗周・黄道周…均足称一代完人」とある。

(2) 文人の側面については、拙稿「明末文人交友考—徐霞客と黄道周」(筑波中国文化論叢9、一九八八)で、政治家の側面については、同「東林から復社へ—詞臣黄道周をめぐって」(中国文化一九八九、漢文学会会報47)で、思想家の側面については、拙訳「黄道周の理学思想」(日本橋女学館短期大学紀要3、一九八九)でそれぞれ考察を試みた。

(3) 明末清初の人々の書を「ロマンチシズム運動」という言葉でもって書道史上に位置付けたのは、おそらく西川寧氏の『支那の書道』所掲の「董其昌を語る」(一九三八年五月)が最初ではないかと思われる。

(4) 西川寧氏「王鐸のこと」と題する一文(東洋書道協会編集『書品』5「王鐸特集」号所掲、一九五〇年五月)に見える。

(5) 黄道周の書論及び書に関する研究論著には「明黄道周論書」石斎集(王原祁等纂輯『佩文斎書画譜』巻七・論書七・書学下、「与倪鴻宝論書法三則」第一則に同じ)、「黄石斎論書巻子」(黄濬著『花随人聖盦摭憶』収録)、「黄石斎《墨池偶談》巻」(啓功著『啓功叢稿』収録)、「墨池偶談〔節選〕」(楼鑒明・洪丕謨編著『歴代書論選注』収録)、「意気密麗、飛鴻舞鶴—簡論黄道周其人其書」(王壮弘、『中国書法』一九八七年第一期)、「与倪鴻宝論書法三則」訳注(『中国書法』一九八七年第一期)、「黄道周及其行草書(上・下)」(一心、『書法報』一九八八年五月十一日・二十五日)、「黄道周的書法芸術」(林仲文、『書法』一九八九年第六期)などがあるが、理念の問題を正面から論じたものは、王壮弘氏の一文だけである。倪元璐については、「筆驚風雨、紙生雲煙—倪元璐書法芸術浅談」(穆棣一甄、『書法』一九八八年第三期)が発表されている。

(6) 《墨池偶談》の冒頭には、「絹本小楷書七十五行、尾款行所較大三行。前有迎首小印二字不可辨、下有『蔵暉書屋』朱文印。後有『譚印観成』白文印、『海潮』・『瀧盦』朱文印。」と、書体と収蔵印についての前書きがある。これは啓功氏が実際に黄道周の真跡《墨池偶談》を見たことを物語った貴重な記録であ

る。なお収蔵印の『蔵暉書屋』印は胡適（蔵暉室）のものか。他は未詳。

（7）『花随人聖盦摭憶』には「黄石斎論書巻子」と「黄石斎逸事」の二文が収められているが、前者が『啓功叢稿』が引用する一文である。

（8）本稿では「書品論」を底本とし、《墨池偶談》を参照しながら読むことにした。

（9）（10）荘起儁編『漳浦黄先生年譜』の天啓二年の条に、「是時魏璫虐焰方熾、文湛持（震孟）・鄭崇陽（鄤）与先生約同尽言報国」とある。

（11）『黄漳浦集』巻首・洪思撰「黄子伝」に、「初与文震孟・鄭鄤、約共劾魏璫」とある。

（12）この点については、すでに沙孟海先生が「黄石斎商刻経義手札跋」（『沙孟海論書叢稿』収録）の中で、「余観石斎称鴻宝数語、正是自道蕭嚮、骨力四句、尤関書学旨要。卒其所詣、遂為明季書人第一、非偶然矣」と指摘されている。

（調布学園女子短期大学）